

● 優秀賞

一人ひとりが個性を生かし、主体的に取り組む教材の工夫

いのうえゆういち
熊本県玉名市立大浜小学校 井上裕一

1 研究主題と計画

(1) 研究主題

一人ひとりが個性を生かし、主体的に取り組む教材の工夫

(2) 主題設定の理由

改訂された学習指導要領では、ゆとりをもってじっくり学ぶことができるように、学習内容が基礎・基本に厳選されている。すべての子どもに基礎・基本を確実に身につけさせるために、教師は一人ひとりの子どもが最適に学習できる居場所を保障し、自己を思う存分に発揮できるようにかかわることが大切である。

こうした教育課題に対し、今日学校では、子ども一人ひとりのよさや可能性を伸ばし、個性を生かす教育の充実が求められている。

一般に個性とは、「よさ」「その子らしさ」「持ち味」「発想」などといわれるが、それは、学習に対し一人ひとりが主体的に学ぶことによって初めて生まれるものである。

したがって、個性を生かすためには、まず子どもの関心や地域の特性をふまえながら、調べ学習や表現活動など、子どもの具体的な多様な活動・体験が広がる授業を創造していくことが必要である。また、各教科等の関連を図り、系統的、発展的な指導の取り組みなど、特色ある教育活動を展開していかなければならないと考える。

(3) 研究の仮説

子どもの具体的かつ多様な体験的活動が展開できる教材を工夫するならば、一人ひとりが個性を生かし、主体的に学習を進めていくであろう。

2 研究に対する基本的な考え方

(1) 仮説について

多様な学習活動や体験的活動には、観察や調査、地域行事への参加等の直接的なものから、取材やビデオ・写真からの読み取り等の間接的なもの、その他、劇化や実験・制作等多くのものがある。

特に、身体活動を伴い、具体的な場に身を置く作業的・体験的な学習は対象への関心・意欲を育てる場を設定することができる。

また、こうした学習においては、受動的に知識が注入されるのではなく、自ら手法や知識、概念を把握することが要求される。困難を伴う分だけ達成された学習から得られる満足感や成成感は大い。しかも、その過程で得られた学習の成果として、自らの考えを積極的に表現しようとする能力を身につけさせることができる。そこでは、既成の方式や固定的な考え方にとらわれない個性を生かした表現力が育成されるはずである。

したがって、作業的・体験的な学習を教材化していくことは、子どもの社会的事象に対する興味・関心を深めるとともに、主体的な学習を通して、自ら学ぶ力を高め、社会的事

象を深めることができるものとする。

(2) 本実践と研究主題との関連

今も昔も、人々はよりよい生活を求めて、地域社会の向上や発展のために様々な努力を積み重ねている。また、現在わたしたちの生活があるのは、人々の生活を高めるための地域の開発や保全に尽くした先人の働きがあったためである。

本単元では、そうした具体的な事例として熊本県矢部町にある「通潤橋」の建設を取り上げ、当時の人々の生活状況や考え方を技術や道具等の面から捉えさせていくことがねらいである。ここでは、資料や見学等で調べた内容を整理し、絵・物語・劇など創意工夫を凝らした表現活動を通して、子どもたちのそれぞれのよさや可能性を大切にしていきたい。

3 指導の実際

(1) 単元 第4学年

社会科「くらしを高める願い～台地に水を～」

(2) 指導計画

本単元の実施授業の構成を下の資料1に示した。

劇化活動では、総合的な学習を10時間位置づけた。

(3) 指導の実際

① 学習課題づくり

見学、劇等の体験的な活動を効果的に行うためには、まず子どもたちに学習目的を持たせることが大切である。そこで、絵カードを使った課題づくりの授業を考えた(写真1)。

この授業で使用したカードは、通潤橋が完



●写真1／「1年生の考えはすごいね。思いつかなかったよ。」

過程	主な学習活動	評価	時間
つかむ	① 6枚の絵カードを並べながら、通潤橋ができるまでの話の筋を予想し簡単な説明をつける。 ② 絵カードの解釈の共通点や違う点を整理し、学習課題をつくる。 ③ 班毎に調査の計画をたてる。	・写真やビデオから、通潤橋や建設者について関心を持つ。(関心) ・通潤橋が作られた経緯を絵を見なが考えることができる。(思考) ・絵カードを見比べながら、工事や人々の願いについて疑問点や調べたいことを整理する。(関心)	3
さぐる	④ 学習課題について図書資料やインターネット資料を参考に調べる。 ⑤ 見学に行き、資料館での取材や通潤橋の見学を通し、認識を深める。	・計画に基づいて、調査活動を進め、調べたことを整理することができる。(表現)	4
ふかめる	⑥ 調べたことをもとに、個人で通潤橋物語(作品)をまとめる。	・当時の人々の様子や考え方、願いなどに触れながら、生活の向上に尽くした先人の働きをつかむ。(理解)	2
※広げる	「台地に水を」の劇で表現しよう ⑦ わかったことや考えたことを整理し、「台地に水を」の劇づくりの計画をたてる。 ⑧ 学習発表会で劇を発表する。	・シナリオ、せりふ、通潤橋の模型等の作成を通し、通潤橋の建設にあたった人々の願いや知恵、当時の生活状況について理解する。(表・理)	10 総
まとめる	⑨ これまでの学習内容を整理し、自己評価をする。	・要点を整理しながら、学習内容を理解することができる。(理解)	1

●資料1／社会科「くらしを高める願い」の指導計画(全20時間)

週	日	学 習 活 動	学 習 の 流 れ と 児 童 の 反 応			
さ	ぐ	る	～ Y 子のグループの 4 人の考え ～			
			Y 子の説明		I 男の説明	
			④ 木を切って、橋の骨組みを作り、五 老が滝川にかけた。	⑤ 大きな石を次々に、そと置いていっ た。運ぶのはどう苦労した。	④ 木は石橋を作る時、じゃまになるか ら切って、作業をしやすうにした。	⑤ 五老が滝川の崖を削って、材料の石を 集め、力のある人たちで運んだ。
			⑥ 台地に水を引けるようになり、米も 作ることができたので、人々は喜んだ。	⑥ 通潤橋ができてよかった。もう箱が 枯れずにすむ。よかった。	⑥ それが大成功して、みんな喜んだ。	⑥ 計画が成功したので、町の人々はこれ で米が取れると喜んだ。

●資料2／学習課題づくりの授業の流れ

成するまでの際立った場面を意図的に 6 つ選
び、絵図化したものである。本時は、6 つの
カードを使って前時に考えた通潤橋物語の粗
筋の発表を通し、絵の解釈のよさに気づきな
がら、お互いの疑問点や調べたいことを明確
にしていっていった(資料2)。

②調査活動

学習課題ができたなら、まず、学校図書館に
ある参考図書やインターネット情報、教室掲
示した資料をもとに通潤橋に関する情報を集
めていった。通潤橋は、県内に残る石橋の中
でも最大級であり、しかも水道橋という他に
例のない役割を持っていることから、文献や
インターネット情報にも豊富な数で掲載・紹
介されており、子どもたちは、自分の課題に
そって意欲的に見学の事前学習に取り組んで
いった。

その後、社会科見学旅行を計画し、石橋の
歴史資料館である石匠館（東陽村）での学習
や通潤橋の見学を行った。石匠館では、館長
さんから通潤橋の構造や建設者布田保之助に
ついて説明を聞いたり、質問をしたりしなが
ら理解を深めていった(写真2)。また、石の
重さを体感したり(写真3)、模型でアーチの
積み上げを体験したり(写真4)と、館内施設
の活用を楽しんでいた。

次の通潤橋の見学では、実物を目の前にし



●写真2／石橋の仕組みの説明



●写真3／重い石



●写真4／「輪石はこうして積まれたんだ」

た子どもたちは、「うわあっ、こんなにでか
いの！」と驚きを表した。橋の上で周囲の地
形を観察し、高い台地に水を引くことの困難
さや水の吹き出し口が石管内のごみを流し出
す働きであることを理解しながらこれまでに
抱いていた疑問や学習課題について追及・調
査を進めていった(写真5)。



●写真5/「吹き出し口からの水の勢いはすごいね」

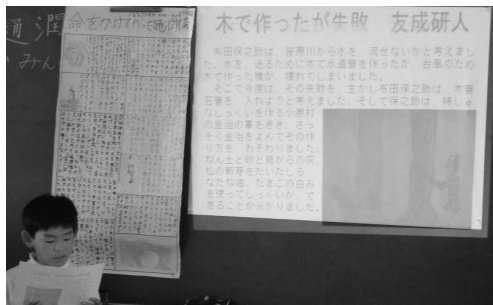
③通潤橋物語の制作

調査・見学を終えた後、通潤橋ができるまでの物語を一人ひとりの創意工夫を生かした表現法で作成することにした。子どもたちは、パソコンや紙芝居、新聞などの方法を選択し班毎に作品を仕上げていった(写真6)。

完成した作品は、紙人形劇、プレゼンテーション、模造紙など班毎に工夫をこらした表現方法で発表をした(写真7・8)。



●写真6/通潤橋物語の作品



●写真7/作品の発表



●写真8/作品の発表

④劇化活動

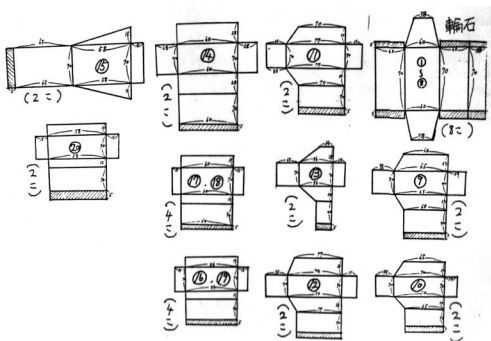
一人ひとりの興味・関心を十分に引き出し、よさや可能性を生かす学習活動を進めるために、社会科と総合的な学習との関連を図った。

ここでは、社会科学学習の発展として総合的な学習での通潤橋物語の劇化活動を試みた。

活動を始めるにあたり、子どもたちの「通潤橋の劇をぜひやりたい」という学習後の感想から構想のアイデアを集約し、一人一役を持ち、学級全員が協力して劇作りを進めることを確認し「台地に水を」の劇化活動に取り組むことにした。

グループ毎に場面担当を決めると、シナリオ書き、材料集め、背景画の作成等、それぞれの担当で作業に取りかかった。橋の設計は、子どもたちにとってかなりの負担になるため、教師が担当した(資料3)。

子どもたちは、設計図を見ながら自分の体よりも大きな段ボールをカッターや鋏を使っ



●資料3／通潤橋模型のパーツ



●写真9／「ここ押さえて」

て切り取り楽しくパーツを作り上げていった(写真9)。

輪石のパーツができると、早速組み合わせてみた。上からの比重が足りずに不安定ながらも、アーチの出現に「すごい！大きいぞ。」と、まるで橋が完成したかのような騒ぎになった(写真10)。

練習では、声の出し方や動作、人や物の位置等、助言指導を繰り返すことで、子どもたちの表情に自信が感じられるようになった。

発表は、授業参観もかねた校内学習発表会という場での実施となった。多数の保護者が見に来られたが、子どもたちは、それぞれの役割を落ち着いてやり遂げ(写真11～14)、約15分間の演技の終了後は、みんなで抱き合ったり、飛び上がったりと満足感や成就感を体中で表していた。



●写真10／「輪石の完成だ」



●写真11／「毎日水汲みはつらいな。」

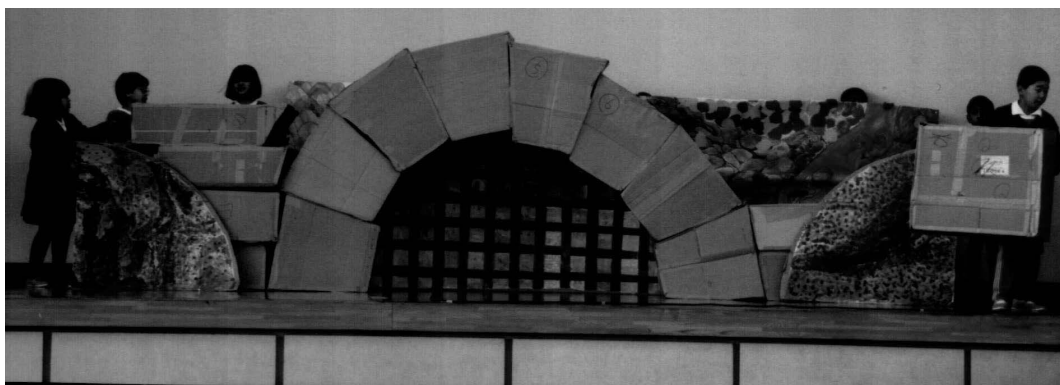


●写真12／「今年も水不足で稲がだめだ。」

⑤まとめ

劇化活動を終えた後、これまでの学習を通しての自己相互評価を行った。特に劇化活動においては、各場面をそれぞれの班で分担して取り組んでおり、各班の演技のよさを認め合う機会になった(資料4)。

また、劇を通しての感想では、練習での苦労や本番での緊張、発表後の満足感について、それぞれが自分のやり遂げた喜びを作文で表現していた(資料5)。



●写真13／「石工や村人たちは、石橋の完成を目指し、厳しい工事を続けました。」



●写真14／「保之助、よくやったなあ。これで村は救われる。本当によく頑張ってくれた。」

1 あなた自身の学習活動について4段階で評価してみよう（発表をした順のみ）

(1) シナリオ作り・練習・発表で楽しく活動できましたか。	(1 2 3 4)
(2) 班の人たちと協力しながら劇作りを進めましたか。	(1 2 3 4)
(3) 途次物語（東話）の内容はよくわかりましたか。	(1 2 3 4)
(4) 人物の気持ちを考えながら演技ができましたか。	(1 2 3 4)
(5) せりふを覚えて、大きな声で演技ができましたか。	(1 2 3 4)
(6) 劇作りから劇発表までを通して学んだことや考えたこと	

わすかな時給だ、たけと、すごいきれちょうした。
役々人物の気持ちを考えながらつくったので、いいげき
ができたと思う。村人のいろいろな立場で、あんな
が、喜んでいたら、なあと、思、た。

2 他の学習班の劇を見て、感心したり、参考になった点を書いてみよう。

(1班) シェーターの、奥手ちゃん、が、セリフを覚えてい
たので、すごいなあと思、た。

(2班) みんな、とても演技が、うまいなあと思、た。

(3班) 劇作りが、大きくて、とても見やすかった。

(4班) 場面、こゝに道具を出したり、おいたりしてい
つながら、は、きりして、いた。

(5班) たけちゃん、が、いっしょうけんめい、話
していた。

(6班) 役割り、担当が、できて、よかった。

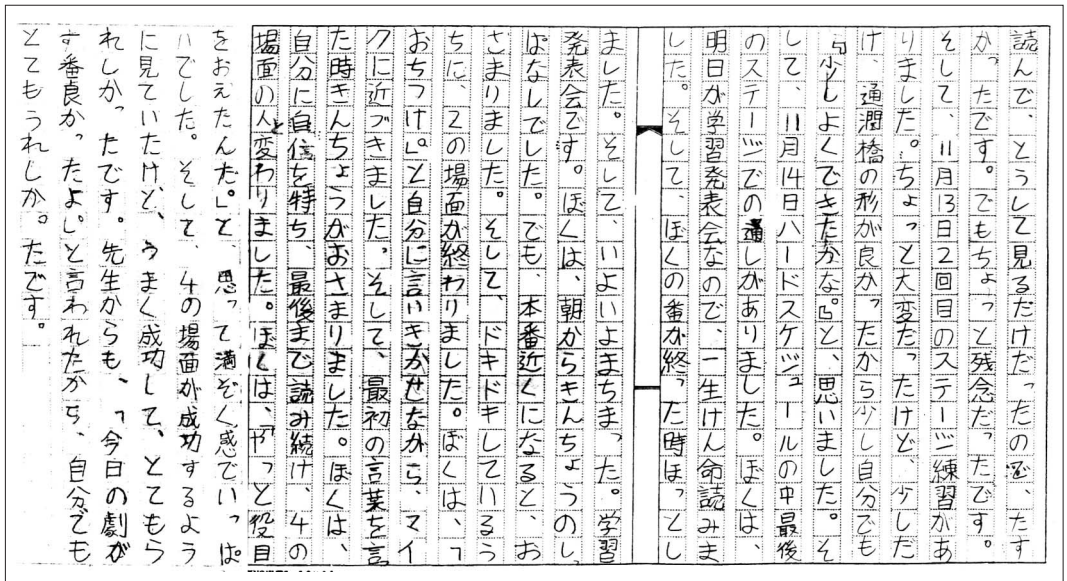
●資料4／児童の自己・相互評価カード

4 研究のまとめ

(1) 研究の成果

課題設定から調査、表現方法に至るまで、子どもたちの興味・関心に基く学習を組み立ててきた。特に調査活動やまとめ方、発表方法においては、選択の場面を数多く設定したことで、一人ひとりの自由な発想を引き出すことができた。

学習課題づくりでは、自分の想像して作った物語をグループで発表させたことで、子どもたち一人ひとりが活動の主役になれる場ができ、活発な発言が続くことになった。また、友達の発表を聞くことによって、お互いのよさを認め合うことができ、物語の作成、発表



●資料5／児童の作文の一部

を通し、楽しく自己表現ができたのではないだろうか。

調査活動として校外での施設活用、見学という場を位置づけることにより、自らの体験や思いを当時の人々の考えや願いと重ね合わせながら学習を深めていくことができた。特に橋の構造や水不足に悩まされた地形の特徴について、具体的に理解することができた。

通潤橋物語の作成においては、課題づくりの際に考えたものと比べ、話の筋が明確になり、また新たな情報も加わり、一人ひとりが調べたことを確実に自分のものにして表現していた。いつ、誰が、何のために橋を作ったのか、その後どうなったのかについて詳しく書かれており、思考の変化が伺えた。また、保之助の功績だけでなく、周囲の農民たちがどのような願いを持って暮らしをしていたかについても物語の中で述べている。このように、子どもたちは、自分がいろいろな手段で得た情報を整理し、自由なカットや吹き出しを入れながら通潤橋ができるまでの様子を物語として表現していった。

劇化活動については、発表の得意でない子

は大道具の係に、活動的な子は保之助や農民の役に、作文の得意な子はナレーターにというように、自分や友達のよさを生かした配役を考えていた。また、せりふを自分の言葉に直したり衣装を手持ちの材料で作ったりと、各自工夫を凝らす場面も多く見られた(資料6)。

また、社会科と総合的な学習の時間との関連を図った表現活動を位置づけることで、ゆとりの中でじっくりと問題解決に取り組むことができ、効果的な学習活動を展開することができた。

まとめの過程では、評価カードや感想の中で、子どもたち一人ひとりが学習の主役となり、学習のねらいとしているものを楽しみながら自分なりに掴んでいたことが伺えた。

学習の満足感や成就感を体得する経験は、子どもたちそれぞれにとって自信となり、次なる発展的な活動に対しても、さらに意欲を喚起させることができると考える。

(2) 今後の課題

これまで、子どもたち一人ひとりが、自分のよさや可能性を生かしながら、意欲的に取

「とにかくやってみようじゃないか。」

保之助の決意に打たれて、3人は行動をともにすることをちかい合い帰っていききました。

石橋作りには、腕ききの石工として知られた宇市・丈八兄弟があたることになり、保之助の家に相談にきました。

「総庄屋様の考えつかれた、水をふき上げる方法でいけば、橋の高さは、約20メートルほどですむでしょう。しかし水を通す管は、一体何で作るおつもりですか。」

「かんじんな所は、そこじゃ。台地全体に水を送るためにはよほど大きな管でなければならぬし、水のいきおいにたえる物でなければならぬからのう。」

「それなら、石をくりぬいて作る方法はどうでしょうか。大変だけど、がんじょうでしょう。」

そこで、宇市・丈八兄弟は石がきの組み方を見るために、熊本城の石がきを見に行きました。

「うわあ、すごい石がきだあ。この石がきの作りを利用すれば、りっぱな橋の石がきができるぞ。」

「総庄屋様に、この石がきの作りを教えたら、きっとお喜びになるだろう。」

一方、保之助は、こわれた木の橋の経験を生かし、水もれの防止に、しっくいを使うことにしました。

保之助は、特しゅなしっくいを作る小原村の金治の事を聞き、さっそく金治を呼んで、その作り方を教わりました。

金治の説明によると、そのしっくいは、親子二代にわたって発明した物で、若松の葉・たまごの白身・塩・貝を焼いた灰・川砂などを混ぜ合わせて作る物です。

「このしっくいを使えば、百年はたえられるぞ。ほおら。」

「ほう、これがしっくいか。」

これらの材料を合わせ、実験用の石の管がついにできまし

— 6 —

た。そこで、郡代の上妻半右衛門をまねき、水を通す実験をすることになりました。

実験は上々のできてした。

「ようがんばったなあ。これならきつとがんじょうないい橋ができるぞ。」

「はい。ありがとうございます。きつと完成させてみせす。」

3 苦心の工事（ナレーター）

やがて、めんみつな工事の計画がねり上げられ、藩にその許可をてい出しました。藩の許可が出るのを待って、1852年12月に、いよいよ工事が開始されたのです。

まず、大工が深い谷間に高い木のわく組みをきずいていきました。この上に石を積み上げていき、最後に枠組みを取り外すという方法です。それから何日かたって、ついにわく組みができ上がりました。

その後、組み上がったわく組みに向かって、大ぜいの人夫や村人達が、もくもくと石を運び始めました。

保之助は、毎日仕事に顔を出しました。そして、みんなをほげましたのです。

「みんながんばるんだ。この工事をなんとしても成功させ、かわききった村を救おう。」

「よいしょっ、よいしょっ、よいしょっ、よいしょっ、よいしょっ、よいしょっ、よいしょっ、よいしょっ。」

少しずつ、大きな石が運びこまれてきます。保之助は、手につちをにぎり、運ばれてきた石をたたいて、そのよしあしを分けるのでした。

「トントン。ううむ、これは、じょうぶそうだ。」

— 7 —

●資料6／児童の考えた台本の一部

り組んでいけるような教材を、子どもの発達段階に応じて工夫してきた。

この教育実践に当たって、次のことが課題としてあげられる。

- ・作業的・体験的な活動を通した学習における、継続性を持った評価のあり方の研究。
- ・地域教材の開発の視点から、地域の人たちとの触れ合いのある学習活動の展開。
- ・さらなる地域素材や人材の発掘と活用方法

今後は、これらの課題解決に向けて実践を重ねていきたい。